

格非を懐う

桑島道夫

九四年九月から九六年七月までの二年間、私は上海の華東師範大学に留学した。街のあちこちで古い家屋が取り壊され、新しい巨大なビルが建設され、油にまみれたような塵が漂っていた。まさに普請中の光景だった。あるとき試しに、部屋の南側の窓（七階）から、吳淞江の向こうに広がる虹橋開発区のクレーンの数を数えてみたら、七つもあった。

格非と初めて会ったのは、九四年の秋、十一月のことだったと記憶している。華東師範大学に本科生として留学されていた鈴木幾道さんという方が、今度彼と食事をしようと思うのだがいっしょにどうか、と誘ってくださった。実は、当時の私は《迷舟》、《褐色鳥群》ぐらいしか読んでおらず、それほどいい読者ともいえなかった。そこで、格非に入れ込んでいた、大阪外語大院生の和田知久さんなども誘った。場所は留学生楼の二階の食堂だった。

格非についてあまり知識がなかったから、読書歴あたりから探りを入れると、彼は、ブルースト、カミュ、カフカ、ボルヘス、クンデラといった作家の名を挙げた。新しい文体、意匠選択にあたってのその趣意説明は、単なる「言葉遊び」以上の必然性を感じさせた。格非の「現実」への懐疑は、かなり異なる時代状況から導き出されはしたが、劣らず切実で、本物だといってもいいだろう。ただ、ボルヘスからの影響がしばしば云々されることに水を向けると、あまりいい顔はしなかったが、これはオリジナリティーを競う作家の反応として当然のことではある。一方で中国の作家、作品については、少数の例外――たとえば魯迅、とりわけ『野草』――を除き、あまり感心していないようだった。日本の作家はあまり読んでいないようだったが、ちょうどノーベル文学賞を受賞して、そのころ中国でも話題になっていた大江健三郎さんのことをあれこれ質問してきたのには、私もほんとうに参った。

その後こちらも忙しく、彼にもご無沙汰したまま新しい年になったが、二度目に会ったのは、九五年の三月末のことだった。少し前に知り合った博報堂上海支社の渡辺浩平さんと相諮り、ちょうど来滬されていた作家の辻原登さんに引き合わせたのだった。場所は虹橋開発区の、租界時代をイメージして造られた、どこかいかかわしい雰囲気のある餐厅だった――見つけてきたのはもちろん

ん、そういった方面に特殊な嗅覚を具えておられる渡辺さんである。

渡辺さんとは、お互い初対面なわけだし、ざっくばらんに、と示し合わせていたのだが、両者いざ席につくや、その話題は真剣な文学談義に始まり、文学談義に終わった。おかげでこちらは通訳に備えて、一字一句聞き漏らすまじと神経を張り詰めたまま――中国育ちの鈴木さんがいたからまだよかったが――、料理の味も何もあったものではなかった。

それはさておき、対談の収穫はあったというべきだろう。というのも、辻原さんが、同時代の中国文学に対する認識を新たにされたようだったからである。

そんな縁で、思いがけず、格非の作品を『文學界』に訳載するという重大任務を担わされる羽目になった。それからというもの、少しでも疑問点があると、ともかく格非のところに行った。幸い、彼の住む宿舎は留学生楼の斜向かいにあり、廊下の窓から彼の部屋（六階）のなかの様子が見えるほどだった。よく、彼の部屋の明かりが点いているのを確かめてから、訪ねていったものである。

格非は、バス、トイレ、キッチンが付いた八畳ほどの部屋（構造としては日本のワンルームマンションによく似ている）に住んでいた。奥さんは北京で出版社に勤めており、彼は独り暮らしだったから、部屋のなかはいたって簡素。あるのは、ベッド、机といすと書棚一架、小さなテーブルと来客用のいす、それにステレオだけだった。南向きの部屋で、しかも確かに窓が付いていたのに、なぜか薄暗い。この部屋であってこそ、あのような、世間と隔絶した小説が書けるのだ、と妙に納得したものである。隔絶といえ、廊下に接するドアの表には、午前九時から午後三時――四時だったかもしれない――まではお静かに、との札が貼られてもいた。

「とにかく毎日、机につく。何字でもいいから書く。修練だよ」

どんな日常を暮らしているのかを問うたとき、いささか予想外の、こんな厳しい答えが返ってきたことがある。現在上海は、一カ月もすれば様相が一変する。しかし、そんな喧騒のなかにあっても、きっと彼は相変わらず空想の世界に耽りつつ、一字一字刻んでいるにちがいない。

翻訳するならせめて彼に倣って作品世界に沈潜しなければ、と私とて思うのだが、しがらみや誘惑の多い日本に帰ってきてみれば、なかなかそうも行かない。